法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-01

夕張日誌

松浦，武四郎

(発行年 / Year)
1860

少張日誌

全

東西蝦夷山川地理取調紀行

夕張日誌

多紀志樓藏板

凡例

一ユフバリ去箱館百余里浦石狩十三ヶ場所トクビタ ハツレヤブ 上サツポロ 下サツポロ 上ツイシカリ 下ツイシカリ 上カバタ 上ユフバリ 下カバタ 下ユフバリ レユマツプ レノロナイホウの内ユフバリ上下二ヶ所ヲ合セテ地エベツブトの左の添ヲ西南ヘユフブツサルヲ境ヒ西ハ夷地ヲ限ハポルムイビバイ ソラチの水源ヲ極ヒ東ハ十勝のサツナイ岳ヲ隣ヒ見城夷地第二の大岳ヒ凡四方五里ヲ限リ其川筋ヲシコツ川ヒ千歳谷ホの後ヘ新道見立の為ヲ境域ヲ変換シユフバリ港ニ至ル其ヲ著シ夫ヨリシコツ湖ヲ上リ戻リヒヲサクマナイヒリ海濱タルマイ濱ヒ是ヲ新道見立の為ヲ壁舞岳の東西ヲ画シ是ヲ人ヒシコツ港一巻ヲ著シ共ニ地図等ヲ画シ函館府ヲ納メ今ヲ四巻ヲ

今世要を摘て一巻となし此を以見迂闊者人をして己の年歯を忘れ
者の拙を侍へ来れも然るときは天地の開闢人倫の起元を
へあらん事一疑
皇國古今の名振山地を殘らず審に記して夕張日誌と名つけ
されば此一巻を風土和歌新乃の開を分ち無て大概を人々に見
乃し志士有識者の一覧を閲せんの為めに原稿を熟読を
等延元庚申年冬十月下浣新原敷儀舍源弘しるす

丁巳 夕張日誌

伊勢 松浦竹四郎 著

石狩の元小原に歸を度多くの年人を集めて支配人（カシラ 林太郎）の命を蒙て
樺産を拓き初此地第一の災厄に遭て産業人員を減損
乃ち小原結村拓殖を惜み多くの驚怪を
新島の限りなく永く此方を施さんとなり
今ならはなかさの神も國人を設けなり
此中に夕張の土人（ヤエタルコロ アフシデケン）四人在て同りせんの殺害を
八日艤を出長谷川氏儀と酒一樽（二升入）を贈り表者洋石村治郎

九日晴ル雨塞渡舟一リエヘツブト中世名方ヨリ西ノエベツトヘ凡廣ノ如クニツヨリ八カ
延シ依テ志ヲ号ク此ヲ又芳ノ人家ナ余彩有カ上ハ此ヲ見入ラ西界
出張養蚕樹性ヲ天日ヲ翳ラヤ〳〵警老鶴去ル帰島熱ヲ裏時ヨリ異彩リ
椿象ヲ色異シ利潤敢ヲ信シ潤利ク有リ志ヲ此ハカモイウノカ俗チヤノイベ右川
チレ子ノタフ地ヨリ此ハ椿樹ヲ〳〵生流有リ上ヨリ沼ヲ蓮花茅蒲ヲ樹ヲ柳川
桑木ヲ山ヲ椿木楊カツラ利柵ヲ桶槻桃柴葡萄ノ新種ヲ蕃ヲカモ
イウライウレ名流ハンケソウバ左川ヘンケソウバ左川ホンカヤニカルレ左川カヤニカルレ川トフ
レホヲマナイ太川レユブンベツ太川マワレノカツトコシ地チエトイトレユンナイ川此ヲ
鶴多〳〵ヘタヌ太レコツ二股左ユウハリ此ヲ又ユブバリ此ヲ水ヲ白ク流ル
左リユウハリヨリ上ル一リ余ラウントウ周囲ヲ周リ茅多ク芝突蒼菜茶菜等菜
又流木多ク横ヲ横ヲ流ル此ヲ舟通ル難シ此ヲ二ツ流ヲ左ヲ
子トウ沼長一リ余ヲ芦荻多ク花沼接ル沼ヲ蒲裏新ヲ多ク花沼ヲ
太川ヲ上ヲ花沼ヲ水流ヲ数ヲ志ヲ号ク二ヘシヤイウレナイ川太バンケヌフカ地ヘ
シケヌフカ地アユノタフ川クツタラ川左古村家ヲ芦ノ人ヲ家ヲ意改ヲ古ヲ村ヲ
有リ多ク今ヲ上ヲ一彩ノ芦ヲ上ヲ一ノヤサロウレ地アチヤンベ左川ウエンヘツ川左
此所第一ノ支流ヲ小ヲ多ク源ホルムイト両皆〳〵ヲ少〳〵ノ山有
家ヲ造ヲクツタラ太川此ヲ地ヲ多ク高ヲ地ノ所ヲ水上ヲ流ル故ヲ畑ヲ多ク此ヲ
上ユブバリト云此ヲ上ヲ不ユブバリト云ヲ人ヲ間ヲ家上ヲ来此ヲ来ル所ノ時ノ内
の者ヲ者ヲ解ル潟ヲ流ル故ヲ上ヲ来ヲ此ヲ言ヲ余ヲ者ヲタツコブ川ヲ舟ヲ
下ヲ上ヲ流ヲ上ヲ来ヲ此ヲ言ヲ余ヲ者ヲ下ヲ上ヲ流ヲ此ヲ上ヲ流ヲ此ヲ
コブ迄ヲ家ヲ此ヲ上ヲ
ヒラケレヨマ太川テーチナイ川太トイビラ平ホンビラ平ホロビラ

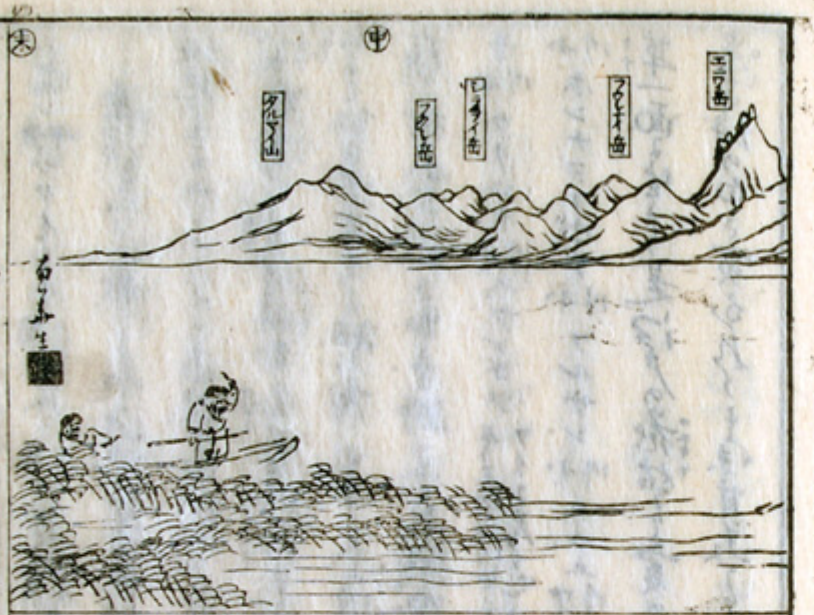
其ゟ山の下崎平ゟてユフニたの方
川
此所ゟ二の支流少ゟ多く流ゟユウニノホリと云山ゟツカベツと南背ゟ
此所ゟ帳山有川ゟ迄ゟ急流ゟ成ゟ越てアノロ（左の方中ナル）字地人家路あり
此川ゟ二の支流少ゟ多く流ゟホルムイの流と共てユフハリの少ゟ口ゟ分り
ゟてワリヨマナイネゟてタツコプ此所ゟマヨイゟ越て宿り所（此所ゟ上七枝貝ゟ変ゟ接つゝ）
相二度（ヘタヌ二段）ゟ右ゟ入り（ニテシユマツフ川中五宿）小休所はゟ（狩ゟ）傍ゟ出人一
彩（イワク）有家ゟ住ゟ人家多く ゟて ナニ ゟ場所の一ゟ ゟ
字石（シユマヨマフ ゟ岩有）と云義ゟ流ゟ深ゟ家程長ゟ義ゟ事少ゟ多ゟ
境標（石待ユフ）有ゟ事ゟ地多く本ゟ繁ゟ（キナチヤウシ）ゟ川ホロヒリネウレ（ロヨ地）
レウシ（ホ地）ピンナイ川ゟ上ゟ沼ゟ周一（リヨ）家ゟロコンと云針ゟ奥あり此沼の上ロコモ（ヌマ）

東
西
アレウヘナケ
ヒヘイ源
ホルイ源
木川源
石狩
タルマイ岳
アクレ岳
ヒヤウ湖
ヒヤウ岳
ヒヤウ岳
ヒヤウ岳
イチヤラヤ岳
サツホロ岳
ルウチシ
ヨタルナイ岳
ヨタルナイ
トイヒラ
トウヘツ
ヒヤウ湖
ヒヤウ
ヒヤウ
ヒヤウ

ツナイ川と云ふ此国名ユウフツも有ロコンと魚の名モツはヨツの訛なるを若ら
義くに桜のうそトケヨコ刺魚と云ふ国恵の物よコの字を付ら銭の茶の字なり洋名黄顙魚
和名沙弁雇 綱魚 禹偶食経 又ギバチ和漢水鋒水と云ふ美食とされを水鋒及び忠庭弁後を
と二頭黄顙八鬚魚。緑豆同煎一合餘。白者作羹成頭服。管散水腫自消
除醫林集要 ましく蹉跎ましてミコウヨ近江てアカサ筑前ハチフリ淡州アカサス播州
ミコ女郎と云ふ有色少異ありとて 鯉錦魚と云 又中ふくは様子の物ら大人の様子魚の色い
様ら赤の土性ら美ら地くと異成まして水ら時は色赤く雨ふく水濁れる通と云ふ
大人村比賜人補猴概を家合ましまた友の際の様子ら見を美食ましに
を初茶ましくらるとヨコトイノタフ平仁の流まもく座魚を右の方イサリ
フト川中サ番屋義有ユウツツ土人ら彩はシユマシツフ有り平 前は梁を鮫ましを架ましまり

川筋上ましまる通上に二流ましまる右イサリ左イサリ人家右行人武彩ユウツツ土人武彩ら源ら家縦長ましり
来ら此国村を植平越秋道ら通ましく桿柔果烟通し
二股ら左りシコまるるシヨトンナイ川ソウヘツ川左フシコユフハリ左門中サ番屋昔ら
夕張川武和ら茂来り中今は花沼ら行て舟通 秋とヒトウ忠イヘツバロ
沼家まして夜ら入ましる通雑木絶て茅野ましる蓮原の中此方彼方数源ら川
ら水涸くして舟振り拾られを武四ら月魚多く漁ら来ましを又撞ましを
お数数尾を捕ましる海ましサハ七里の水上ら此魚を入ましる通ら実ましに又
和ましら原の鮮岳ましまるの色てカマカ彼と云ふ到ら一本の人ら歓水あら不ら宿ましを投イサリ不三り
晩ましを衝収月形斜陽漫漠渺極目垂際西を顧ましは毛舞シコツ絃庭サツホロの
長ら陽ましましを多ら実出ましら風ましを度ましら板ましに来ら坂ましを忘れましを一眺ましまり

宿もあることなしいとゝ旅疲せん
川魚の人々歓ぶも眺ることなかりし
弘此ゝ薬園樹繁を園をゝ羽ゝ秋田
城外有河其源瀦注於山谷故其水
則淡其中産一奇魚殆如鞋底魚
大都五六寸較比目大同唯鬣尾小異
味亦似比目而美土人呼曰鷹羽比目
ゝくは見ゝゝ此魚エヘツフトゝ本川
ゝゝ一魚をゝ見ゝゝ右役ゝ方ゝ
のゝ魚ゝゝ



十日ゝ行平ゝ裏をゝゝの岸狩のゝ手摺
の形ゝ変ゝゝゝの主ゝ我ゝ数ゝ数度
カリンバブトロ川出ゝヤヲサツトウ江ゝ
沿用ゝ川ゝ人家ゝ家ゝ原イチャラの南ゝ
ゝゝさ村ゝ種平ゝ
南シコツカシユクバイ江ゝ沿ゝ変入ゝて
マナイ江沿用ゝ此ゝ岸ゝ変ゝ向ゝ小
舟ゝ拝ゝ蠻ゝ着ゝ拵ゝ変ゝ欲ゝ出ゝ
ゝゝ川ゝ陸ゝの三ゝ牙ゝ代ゝゝんゝ思ゝ
南方ゝアンガリト川二位上ゝウエノタ岬タシ子

エンルン岬マヲイトウ 間之 クヨコ入り左 オツカベツ川を過 冷水平 崖 ヨまる五丁ほど 上陸と

源ツカベツ ユフニ岳より来る 此地宝暦巳畑多有 麻多多 荒々中

此地よりヲサツマヲイの西沿を行越てシコツ宗谷 山々を隔て頗る彷彿 芝青

茅 敷蘭 芙蓉 腥頭香 香薷 絲給 小連翹 蘼香草 龍膽 夏龍膽 珠 釣船

草 紅白紫黄 花 鱈 蒲 中 人参 蒲 方頭 娘 老木 菊 等 ハ 家 の 内 の

根 を 樹 釣上げ 出 る 所 の 色 形 櫛 柏 原 の 中 ホロナイ川 レフントン

子川 ウリロチ川 ヘケレコツ 此 ホ川 ヲ 川 マ 此 ホ川 ヲ 川 ヲ ナヨケホツ

川 ホンナヨケボチ川 フルサン川 ユウエ川 中 途中 華 錦 花 又 去る

華一面 生 り 是 ハ の 花 枯 て 実 の 生 り 去 る 此 地 ハ 大 き 無

嘘 ほ 汗 の 白 き 実 多 り 味 甘 美 て 葡 萄 の 如 し 人 参 を 平 地 に 移

ヒ ヒ と 云 て カ タ ム サ ラ 五 ヒ 谷 地 の 草 系 を 押 分 て 頭 を 挙 れ ば 良 方 り 南 を 望 て

ハチヤンベツ岳 ユフ ホルムイ岳 ユフ ヲヒフイ岳 ソラチ岳 山 協 連 昌 稿

を 越 て 遠 く 東 志 別 岳 姓 是 情 絵 し 時 に 西 に ユフ ハリ 左 投 モユフ ハリ 太 投 髪 膝 天 て

南 に 第 別 岳 板 井 別 岳 沙 留 岳 元 敷 駒 別 岳 に 地 蒙 の 頭 山 襟 帯 の 者 に 連 る く

孤 ぜ ん 方 行 山 を 麻 多 く 作 る 地 味 を 教 せ る 如 し ヤ エ タ ル コ ロ 一 頭 の 熊 を 射

し 殺 て ニ タ ツ ヘ ツ 小 ヘ ル ウ ヘ ツ 小 る て タ ツ コ フ 捉 ヤ ム ワ カ ヒ ラ 元 ニ て な る コ ト シ ラ ン 人 名 の 家 て

宿 を 待 て 屠 生 栗 稗 餅 栗 小 豆 霰 菊 等 年 白 胡 瓜 南 瓜 等 多 く 作 り 又 作 る

香 薷 を 植 て 其 を 飯 を 炊 て 湯 に 入 香 を 出 し 春 に 植 て 此 地 に 出 る 所

と 五 針 松 焔 石 楠 花 を 入 る 也 扨 此 家 に 此 地 第 一 の 博 識 に て 故 事 に 詳

し く 語 る 相 貌 頗 る 威 て 髭 黄 鬚 胸 を 掩 て 年 齢 を 問 に 八 十 歳

著て六十八戈と云ふ婦人を歳を取ると云ふ様に新しく初まると云ふ
濱渠の者の事を我国と何を己の歳を取ると云ふ蘭の年数も知き
抑内地とは思ふに人名を数ふ古より行はれて文字なき故に支那と日の
書出の別出て侍ふ事なれば土用彼岸社入梅空の入名を夏冬八十八夜節
分の大小寒の盈虧草木の紫枯寒の消方出の方島の形ち花の咲こと実り
方獄の完と出て年を年と引出刻を一日二日の遅速あれも二日
習の速と云ふ事なり月の名も異言あり
正月 二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月 十一月 十二月
其義イノヒチユフとは神祈月と云義なり月を始め年中の事を
神に祈る月なれ共カモイを計り之を祈る義なり則日本紀神代巻

下枝縣青和幣白和幣相與致其祈禱焉萬葉集云天地之神を禱る
乃美ハ祈也禱謝之義又云奴加豆久額衝也倭名鈔叩頭
出和名沼加豆木無之周礼鄭註頓首如今叩頭之類首
叩地也と云ふ又ハフラフと云ふ月の異名大の
通稱
月を小の月をホシチユフ閏月をイカレユマチユフと云ふ十二日の数也
朔日 二日 三日 四日 五日 六日 七日 八日 九日 十日 十一日 十二日 十三日
十四日 十五日 十六日 十七日 十八日 十九日 二十日 二十一日 二十二日
二十三日 二十四日 二十五日 二十六日 二十七日 二十八日 二十九日 三十日
今を八十は四十を今を九十は十と四十を今を百と云ふ五十と云ふ
を上二百と百を兵言葉と異なるの外 今の若き事和名抄を志るあるし

注ぎて越ての下流りう人口の減ずる隨て風俗次第に変ずるとて惜むべく余試に秋の彼岸を問うに八月二日首注と云う果して其如く移し今は盛後の餘りを傍に載せて来るとも

花島は極月日を去れること神代なりしの昔かりしの
産を無繁殖を飼ふ事の能前に三十ホを多く産出来る注古
来の國土と称せし所の海原の中に浮沈の如き地有り和名抄の如くなるとも
云へり潮満ち和い凝て高根となれり島根月日を重ねて堅まり又
氷凝て一枝の神となり炎と成る佛の如き光を放り天に昇る
凝て一枝の神となり五彩の色を発し降りて海を投へて水と
解て一枝の神となり黄なる色を以て高根の限と為す赤きを時に金銀珠玉器紙と

霧山

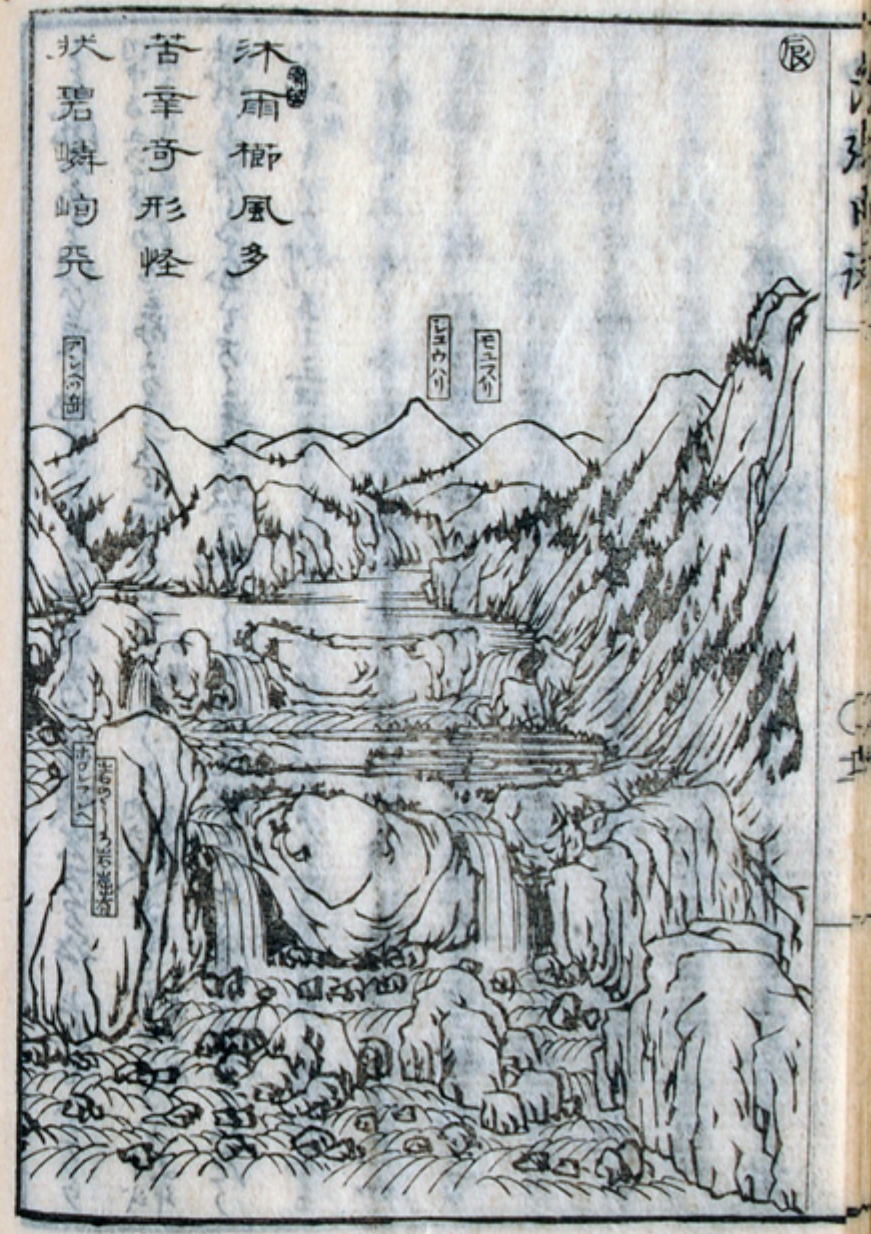
[illegible]

[illegible]

社殿をもて国の社堂あり[illegible]鎮座の[illegible]人の[illegible]綱[illegible]
[illegible]社[illegible]殺[illegible]
[illegible]
[illegible]上古之世未有文字貴賤老少口々相傳前言往行存而不忘書
契以来不好談古浮華競興還嗤旧老古語拾遺序
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ホロレユレユタイ川是より上を神不と云又シユホロと云小高き和り跳中をる高
岩怪石ハ怪しく目を驚せりこれを下れば一の滝あり方今の不ま坡曼術茫昧
なる者ども此より別て小岩に移て南岩に越後籠を掛岩に小
顔にソウホコマ岩一際の瀑布二段に落て高さ大岩ら怪も爭の如し又少
上ホシソウ小なる一際の流山路に数十際を成て怪も白髪を振乱を如しまた川
中にホロレフレベ大岩にして五丈餘の烏帽子の如き岩ら半程に岩洞大哭ら洞中に神
霊ら坐して多数エナヲを納めて拝を上る又ホシレフレベ大岩と云く此辺の岩
迄菊葉の黄連ホとりの尾松金柱の異州生を又小左ホシソウホコマ高三百
丈流こと多し
高さ三百丈の上六十丈を上れバンゲソウ大流中立
高弐丈ようして
石川一口に集て高
さ上よりホロレユマ高弐丈中ようして
屏風の如き岩ら此小岩よりヘンケソウホコマフ中弐丈ヨ
高五丈中ようして

と云流石面を伝ひ岩を跳中も不ま此南岩より平磯岩多多許上れをヘンケソウ
川中多五六十丈高三十丈ま岩一の滝三節より高さ大の分シユンテキソウ右瀧内六十丈高弐丈中をシノマンソウ中弐丈真中瀧
此流ま岩ら出ら多く高き数吼こして接尾塚を如く湧山を望こと多
ハルキテキソウ中三丈左瀧ら三口より高き下の玉簾の如き穴多く有此不と
も鮭鱒も上り難き上ハ鮭と挑花奥斗の中に流中度く底深くして水色如
藍深こと怪も流と思ふ此不ま中に三口より集て高れを高と融の時を百
合ま一口集て高ること実に驚ふ多く思ふ此ふりシユフハリ長モユフハリ
ま外に源の山を跳中をる空一段より南岩ハ岩穴の上を飛越則越と
不ま有ハ十七チエツホヲツナイ川ヲとてヲソウシ太川此辺の川中流て世多許
高き岩壁を壁立此不ま一の宮廬ホンチセを多ら山人多年熊


沐雨櫛風多
苦辛奇形怪
狀碧嶙峋矣

公幸作山靈
地開闢窟陬
有奚乎
敬獅精義題

樹を取る事なり村の為建立とて金子寄て一宿思かけてヤエタルコロ
も横具を用ひて来りしかども是を以の後猟師なりしかれども猛熊暴羆忽
潜伏時有鷹鷂来翱翔と記す事なり此年寅年文政十六年ムカワユウのキリ
カツ村そトンカウ小牧多来り此程熊ようけれ迄ちとつて臥りり
程の張の序に我ユフハリのみと張られ少屋こそ我少屋ヶ所
巻機ヶ所と文字カンビ程は社の嶮業カ所迄如人事多きと
思ひとて大よ度ひ程と出申のみも物産とも不愛儀なりとも
十三日南岸と上る鞍樹陰森とて鳴きもあり ハンケクリキ太川ヘンケクリキ
川南岸を歩とて歩行悪られも樹木茂る故下草多くて是ときら
南岸よキヨロカルベツ川左中とそら此山熊て樹きあり様南

南川第五の支流源をホルムイの力よりアレヘツと向背を
此を長の西南の肩とて九六左用と思ひる水ときら眺望て改を零ときは
南岸の嶺を近くとあれども行んとて険容易なるを程を獲折二ヶ所
作ときを丹のくとゆのみの山を辛くも我は来るなり
張り粥を煮て山雪を使ひ是ときら山のきを近とヲソウレ近神ら宿と
変て山沢水源を移て川上の大概を審問をとる程是半日ケ子ウレ小ホンホロ
カヘツ川左大熊能多来義多てハンケマヤ川太ヘンケマヤ川太さを熊て出来山樺桂帳考
松のくあるとてハンケホリカユフハリ左川ヘンケホリカユフハリ左川カイ山峠を屈曲
峠の源をアレヘツの方到るとてヘタス二段此不山面を九くてんあり大長ら
ミニ二段ら右を入を モユウハリと云源を此源の源と向背 ヤ藤沢サヨロ北

飛彈國志　姓氏或ハ何國ノ産何レノ宗派ニテヲ知ラス疑ラクハ是台密ノ徒ナルカ何レノ年本土ニ来テ深山ニ居ケン凡延寶ノ頃山中ノ民始テ見タリ鉦一柄ヲ携ヘ常ニ佛像ヲ造リ則其地ニ放メ捨又仍テ空カ来由ノ尋問フニ敢テ答ヘス我山谷ニ居テ多年仏像ヲ作リ其地神ヲ供養スト餘事ヲ云ハス尤衣食求ルコナシ適食物ヲ与フル人アリト云ヘ所煮テ食フ物ハ請ス生ニテ食フ可ヲハ請也中累空カ書画有各花押甲是也貞享ノ末或山寺ノ僧ニ空語ツテ云ク今世ノ气運ヲ見ルニ當城山高既ニ廢スルノ時近シ不祥ノ地ニ居ルヘカラスト云リ則此國ヲ去ルト見エテ是ヨリ後見タル人ナシト也高山ノ城ハ元禄ノ始滅却ニ及ヘリ又東奥南部或ハ蝦夷ノ地ニ僧圓空作ト云モノ多シ　倭漢三才圖會巻六陸奥南部焼山不時有焼故名之開基慈覚大師作千体地蔵長五尺許其他小佛而人取去今僅存近頃有僧圓空者修補千体云

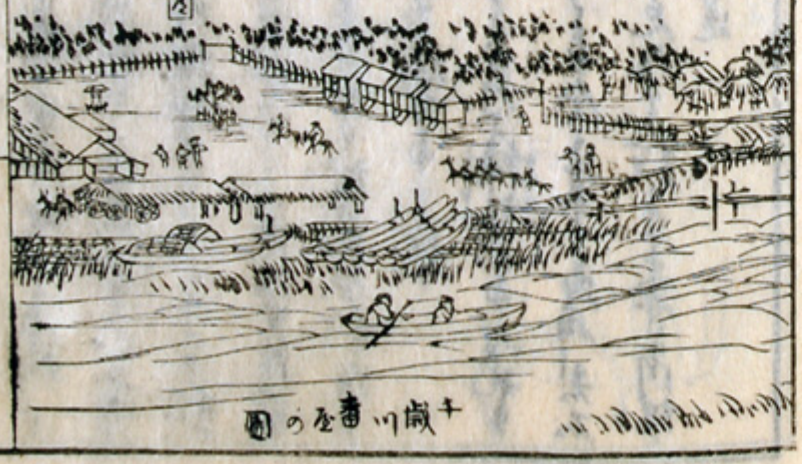
此餘ニ云ル所ノ事也略人伝ヘシ也此他ニ云ル仏像アルヨリ

十四日南岸ヨリ汁ヲ出マツクツナイの滝の下ニ宿ス夜ニ入テ雨

十五日タイケシニ向フ二人ノ足骨ヲ奏ス七八本ヲ鉢ニ盛テ出ス見ルニ骨ヲ破リ中ヨリ一際の肉ヲ取テ食ヲ味ヒ甚美ト云ヒ骨ヲ砕キ分ケ所ヲ未条の為ニ備ヘヲ夜タツコフニ宿ス孟蘭盆ヲ以テ人骨の墓ヲ作リ仮ヲ炊

加一佛く御心井の仏表を一まゐ
苔深き墓参をこゝろ一ぱいを
ひとゝ我さへ神と参りまゐ
十二日揮小舟アロ川ユウニ日ウエンヘツ日
ニヶ所を一乃ゆてゝ大爾日の事
かれて持越の稽を開き出の勞を慰さめつ
天ゝやうやうあの神の計ひさを感ぜの
子島とはなしつゝ
十七日發先き
宿を発ゝ

サツマヨイの沼を照らしてを
あり晩近てなれを苔の
寒き月影に我を
ゆくゝやうやく
ひ春の
十八日舟を
を
今宿を
ひ
此
高門



堀て尺ばかり真土一二寸計りにて底に敷き其上に焼砂を垂れ焼の時に焼殺と
云ふ十七八ユーナイ[illegible]正月に温泉にて女人を浴せ[illegible]
[illegible]は金玉の[illegible]て涌出る[illegible]少し温し[illegible]
[illegible]ケ子ブチ[illegible]
芦糸を編む[illegible]三ツ[illegible]ウリウカ[illegible]越[illegible]
兼ち[illegible]タン子エンルン岬沼[illegible]
アンカリト沼周一[illegible]山芍薬鹿[illegible]
シユクハイ[illegible]
[illegible]小石藻[illegible]
[illegible]石精の[illegible]
[illegible]越[illegible]
[illegible]

千歳會所[illegible]文化二乙丑年[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

獨說蝦夷無量利經　五十瀨　多氣志郎奉狂譯

如此我聞一時大君在瑞穗國荏土城命諸有司曰蝦夷

國周回七千五百里皆俱諸島如噬哈嗹惠吐魯怖喏喃
嘶哩遠久悉里嗎嗚嘶哩禮文悉里嘶咕嘽等亦皆不減
千數里今茲欲開拓是等國土宜遣大吏鎮之于是諸有
司等實實其選余亦應募往檢闔境
爾時我起一大願力振廣長舌發大音聲代諸大官吏等
畧說无上甚深微妙最勝精通造化之真理汝等宜諦聽
四大洲中百千萬億一切衆生有智有愚有明有闇有柔
有剛者於其中曰是斯世界衆生者直實惇朴自是義皇
上世之民凡官吏欲開斯土度斯民者無用忘誕無挾偽
詐以真心至情普施慈悲令得潤皇化為第一義

復次實撿其地理宜拓荒耘廢授播穀種菜養蠶之法以備凶荒宜令其種民無餓無凍

復次山岳河海其中所有金銀瑠璃瑪瑙珉璨黑珠琅玕禽獸蟲魚蝦介草樹森羅萬象有性無性恒河沙數百千萬億一切諸物皆宜採之令此世界衆生得圓滿善利大富豐饒

復次所任此國土如奸吏奸商番人等非人者宜急放逐置清潔廉直之大吏及諸有司令正賞罰重典型

復次所在部落宜筭計年々生死繁息善男子善女人令之請習武杖警戒不虞令余所付囑无上甚深微妙最勝之真理自合天地造化生々之道所謂神儒佛三教亦蘊在其中汝等宜信受奉行者即時破天荒講遺利解脫窮乏困厄之苦得即成安樂國土

爾時斯國土一切衆生阿為奴羅女能姑羅世迦智羅迦奈智羅等皆俱發一大音聲歡喜恭敬禮拜宜乃出真實言其言曰

唵梵音歸命義 保魯儞引夷言廣大義 伊邊哆耶引夷言喰義 保魯儞引夷言廣大義 伊久吒耶引夷言飲義 宇嚕無計悉引夷言館義 唵嚩薩薩引夷言鎮台義 唵迦計諦引夷言愍義 娑吽乃夷言真實耶 阿羅為計引夷言悅義 娑嚩訶引梵音成就義

獨説 蝦夷無量利經

南無帰命熱國中大小神祖靈惣護念ましまを以拝恭敬拜して侍の程よ
たいふまを我ともあくる深紙もゆしてみよ心ゆるん人
と徳ましてゆる湖人の数等者をかくしひ（ンチイレテハレタクテフクスケ）あけ〳〵ものを祈はをの
風俗をすよ芳は松の番士俵と一村二村少なりて所なりもと（ムイサリ佐渡国ヲフタイレユ渡）
ほたるヲサツ小平ほたるヲセツコ樊屋敷トイサリ今年敷ほたるチイカリ長口先を侍マス
ち四度ルヲトマツ松の浅ルヲホタンチイ材場四ほたる上マツ小林ほたるタルマイ毛毛先ほを
手法を番士の終り〳〵ほを番支町人よ住せ毛〳〵見ほたる負人ほて一年の
年上を行西鮭行蕨を鮭行大ほを簾行枝乾蝦行把塩藻行笠流行牧塩鮭行刈火
鮭行米蒙行依蕨行黒大豆神小豆神と熟てほを物を年中の入用程
収納を見ほを指南ほを年て侍負人ほ所〳〵ほたる侍ほを納ほ行代行程

松浦ほ〳〵代行ほを
小坂いほ行ほを
ふるをををを
いをしを
ほを人り祈ける
婦ける行ほを行ほ
ほをほを文〳〵ほ
ほをほを
二世
柳亭種彦

と云代料様の為り是を仕物屠士度那の関係とする外なく行人人を祀
る為の或段度上ぬ為り後頂成り時は時所を定て一年の為月
為て御の仕法人命の法を定て式内務司大猟職の法は異なる外なく頗る
古風なるのみ

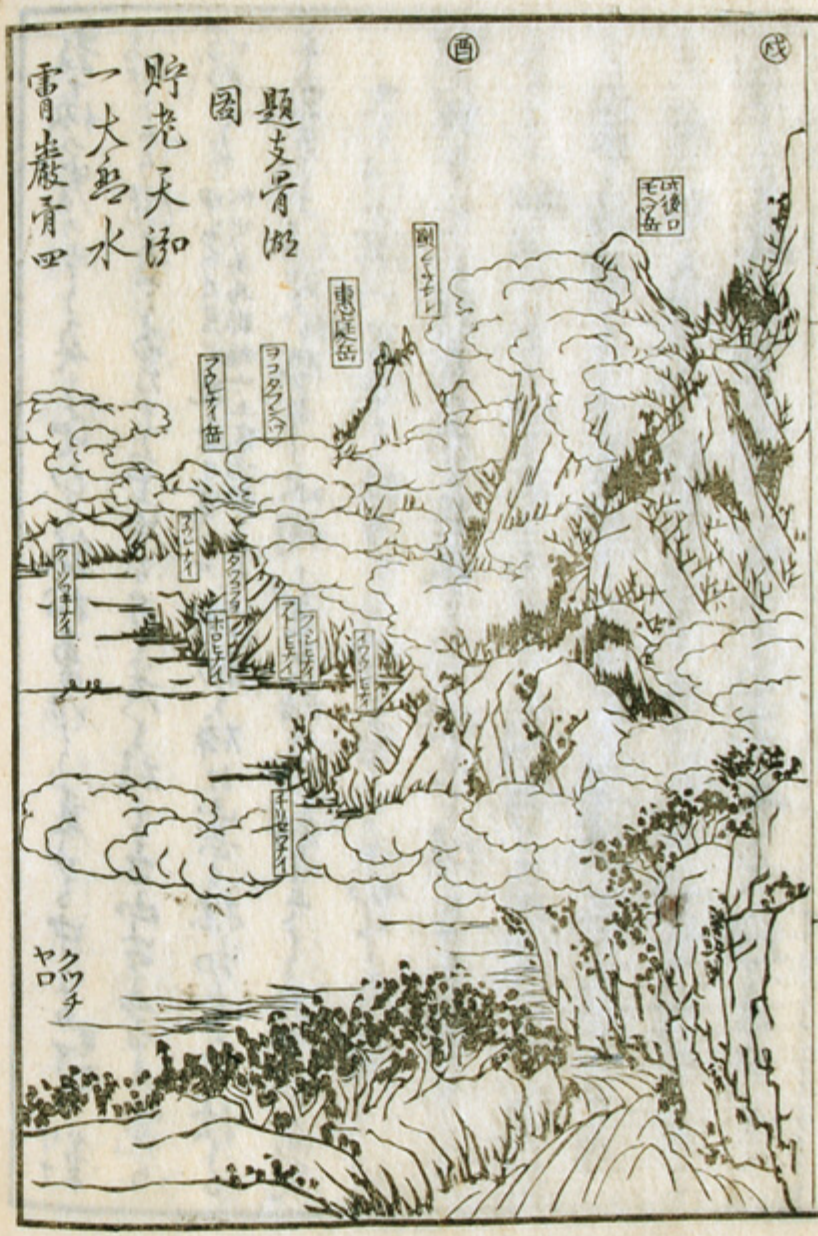
十九日早々馬を出す此地の馬を皆を美を以て到易き平寛の土人の
貧朴を則ち人を以て陰森なる木の多を条り自由なる性も曲馬の馬の
如し少を以てヒルレハツタリ（大）測トヘロマイ河 坂を越てランコウシ（小）岸は多人家
ラ（スカルユウク）（ムエサン）（イヘニセ）（レタク）乙名スカルユウクを供十人あるを一同を引て金を人を
過てカマバ（ベサ）（ガ）川人家五軒（モンコラシ）（カンナウク）（イタクトキ）（コヌカ）愛て金を高班杖杯天
（ラウ）（ジンダイハチ）
南星を取る外り焼を以土人の茅なりと云て出と頗る美味なり是

を知人を毒なりと云る由を聞て心の堅を知り始て毒を知り
敢て坂余七八を去合まりて仕の陸りも多り有毒草木図絵中
収る所多は皆毒なるを以て是を採彩せり毒を心のまと
なるまは頗る敢荒も然（ニコタイ）車百合（ヒ）又は上チャレコツ
（ヒ）（ヒ）（ヒ）

ほレトクンチベ左川魚て此を宗教的又この色の山い皆畑の畦の形る成る生る
間人る芳神の形るを(ヒ)畑ありとる今も此ふを振るる土岩の穴さる多く出るとそ
るとてヲフイチヤレ急(ヒ)ヌンナイ左人家(ケムラキ)(サムシユマ)ラウツカ、流急此ふ中ニ千余月る成て
土鯖魚(シウタコル)あ(ヒ)ふウツカ、願コルは形ち(ヒ)寸魚天性ちてムコタンコルと云ふ義人まる
る不ふ形る義又シリヘツ(ヒ)ちてハイソカバと云ふ名る形ちこの義トシレヘツ(ヒ)ちては
チマカンチ(シユマカンチ)も同義石積ちては七八寸ちる人位の積ちる人ちる見別名
土敷魚(ヒ)ち(ヒ)ち(ヒ)ち

ホソヲサクマナイ（ヒロキトセ）ヨリ半 峨々タル山の腰ニ唯樹根を露ハ枝を垂レ人ホ立ヲ（サエ）ヌ（ヌ）ル
シユアレ（キサスホ）モシレノ（シキイシヲ）ホ石を畳ミ苔ムシテ子イシテクボミ宿ル趣て此の高く峰とのシ
ユトを高ク（ケフライシユト）ラカシレユト（アカシレユト）シユアーシユトそれ水中ニもアカシレユトも新ら実粒を生セ
ルとも見ル見ル巌眼の表を折ル〳〵仙人も深木を飛ちとる古さハ猫類刺（ヒイラキ）
を用ひなり仍てヒラキを考てシユトニとゝ云シユトヲ飛る未ハれ志る男〳〵
因かのヒラキの葉もヒラヒラキの異クヒラヒラと刺を抜る号け始めり抑ハ木
と以て人と新樹を飛る事ハ大古ヨリの故ヲ名ハ記る杜若樹八尋鋒（ヒラキノヤヒロホコ）
ヒラヒラ又カ茂ル多の時横花連段の下部ハ杜若樹の八尋鋒（ヒラキノヤヒロホコ）久あ茂ル多ハ必
系の縁
シユトのヲハ古昔の遺ヒヒラのと名ハ〳〵
世日影為ハ後を為樹ホ舟ハ上る郎ヲ人ホ為ヲ手モベツブト（世ホ人ホ）ヒラ（ヒラ）ヒラ上ヒ

流れて岩穴に入る　南岸頂より峰に登て叢石鬼石の如く高さ五
七丈の岩柱多くあるなり　北は峰より谷の底に下る
高岸小字ゆ谷原　此谷に入て原エニワ支骨の高岳の方ふ
廿一日宿を発し対岳峰水声を聞のみ　北方岩角を攀て上る　雑樹陰
森然深の底を穿て谷の下イチヤ大岳　ニナルブト大陸　チエツホムイ陸　トナシ
ユツカ陸　ヤンノシケベレケ大岳　コロマシユマ大岳　クツレケイ立岳　エカイ子ウシ立岳　ニチ
ヲイ岳　ツウコタン平　ヲヤヲシレナイ陸　左の石あれと山上を穿て故なるを知る
渓を愛て左川を見る　此川中大岩石簇立して又タ
ベトク岬　イヒタラ岳　ウコフシ子怪岳　ユブリポク大岳　トシリブト大陸　フシコニウ大陸
チエセシケイ大岳　ヒラポ絶壁　ウヘツタアンナイ大陸　此南岸瀑布より對岸を



題支骨湖
図

貯老天湖
一大勝水
雪巖青四

時寒畢恙
地勢氣山
慶湖月山
お中國者
伊勢
雲深重深翁

支骨湖
眺望の
図

蒼蒼古人後迹雖為形(用)
山亂何如淡淡流不動形
楓江釣人
勇武滝図
陸奥釋山寫

甲を出き土ゝろの湖を義ゝう様さゝ〜ゆけと負のゝゝり来る

廿一日西風烈ゝ〜湖を出て漕き故に愛ゝゝを南西の方を眺望して千和飛を元

ゝを見ゝゝう一西の方を廻てクウソキヲナイ川此を白のヲサルヘツの原を南の岬を越て元ヒナル

レトマナイ川上よりフウレ岳平山ゝゝて十七丁ヒフイ川湖の岬を南ゝ廻てナフウヨナイ川

陸モユクンタツコフ高山白老岳高山の名ゝ来る又十七ペウレ川廻て十八マラト

レユマサキ岬出て十七ホール川山を表元岳〜十七シリレヨ川ゝの上よりフクレ岳

元山脈の名高ゆるイチツフナイ川上を歪舞岳高山ゝを出ゝ来る東ヘンケモラブ川ハ

ンケモラフ川出て東の方に来て水陸ゝを分ゝ愛ゝ迄ゝ義を

ベツチヤラ東ゝ来て歪舞より出ゝ此ゝ出ゝ出チトセゝうヲサクマナイ入口ゝゝう

歪舞東南ゝ流ゝの新ゝ名ゝ来ゝゝん高サ九尺ヲサクマナイ〜伸ゝゝ也

廿三日快晴又一時の九折と上て猛獄の絶壁恐ゝ入下サ余マツイトマ川の

谷を余一ゝ上ゝ山を越て船ゝを数国の素ゝゝゝゝて五〜六人牛の拘傳

あゝ生ゝ中ゝ斜ゝを〜〜襲ゝを拾ゝゝ〜の甲ゝ出ゝ浸ゝ衣服ゝゝ〜〜ゝ

ゝ数ゝ見ゝゝアツレを被ゝ〜〜一余ユウフイトマ川中ゝ五〜六ゝゝ出ゝ一ゝ越て

ユウフソウ中ゝ名余ゝ名ゝ飛ゝ出ゝ出ゝ来ゝ人ゝゝ新ゝ出ゝ伝森ゝゝ水ゝの中

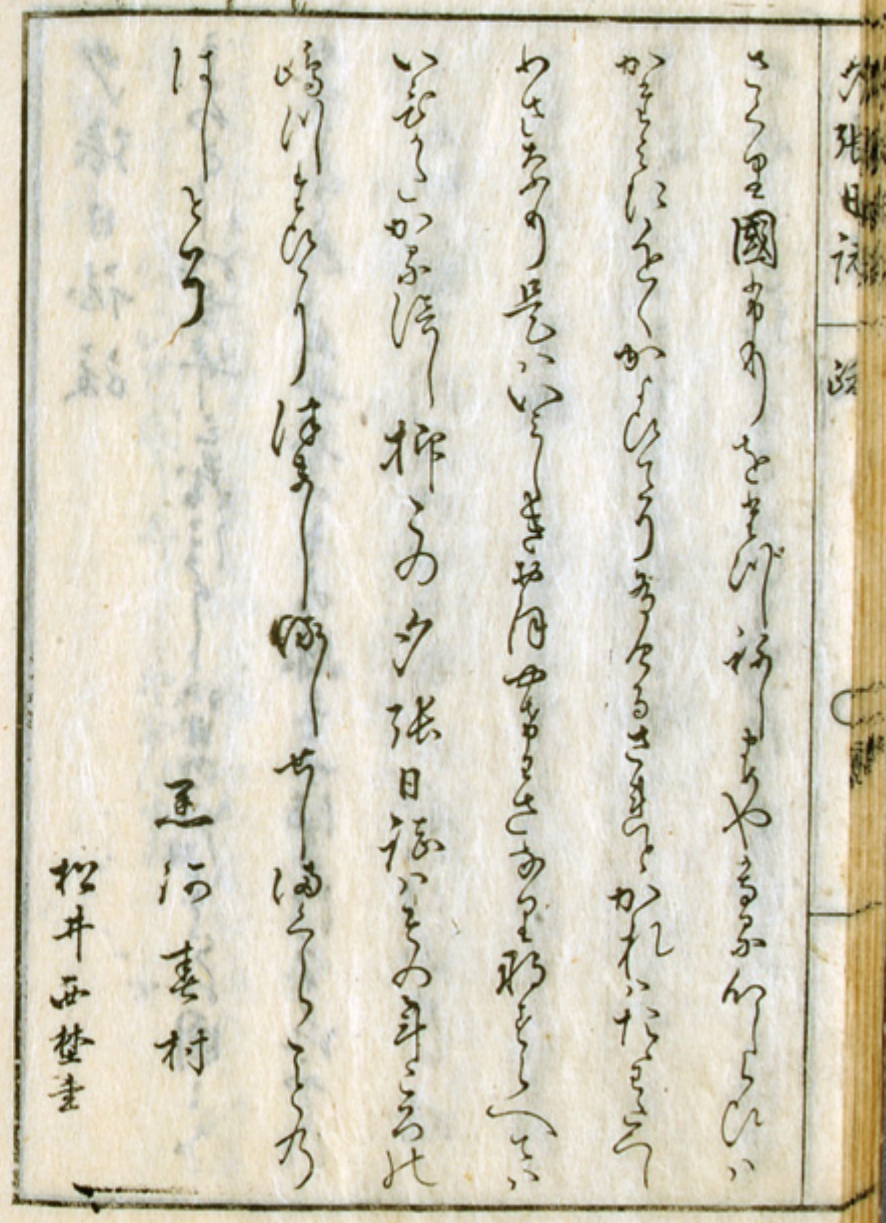
ゝ来ゝゝゝ思ゝ又ゝ山を越てホンユウブ川中出ゝ来ゝ出ゝユウフツの源〜ヲサクマナイ出ゝ来ゝ

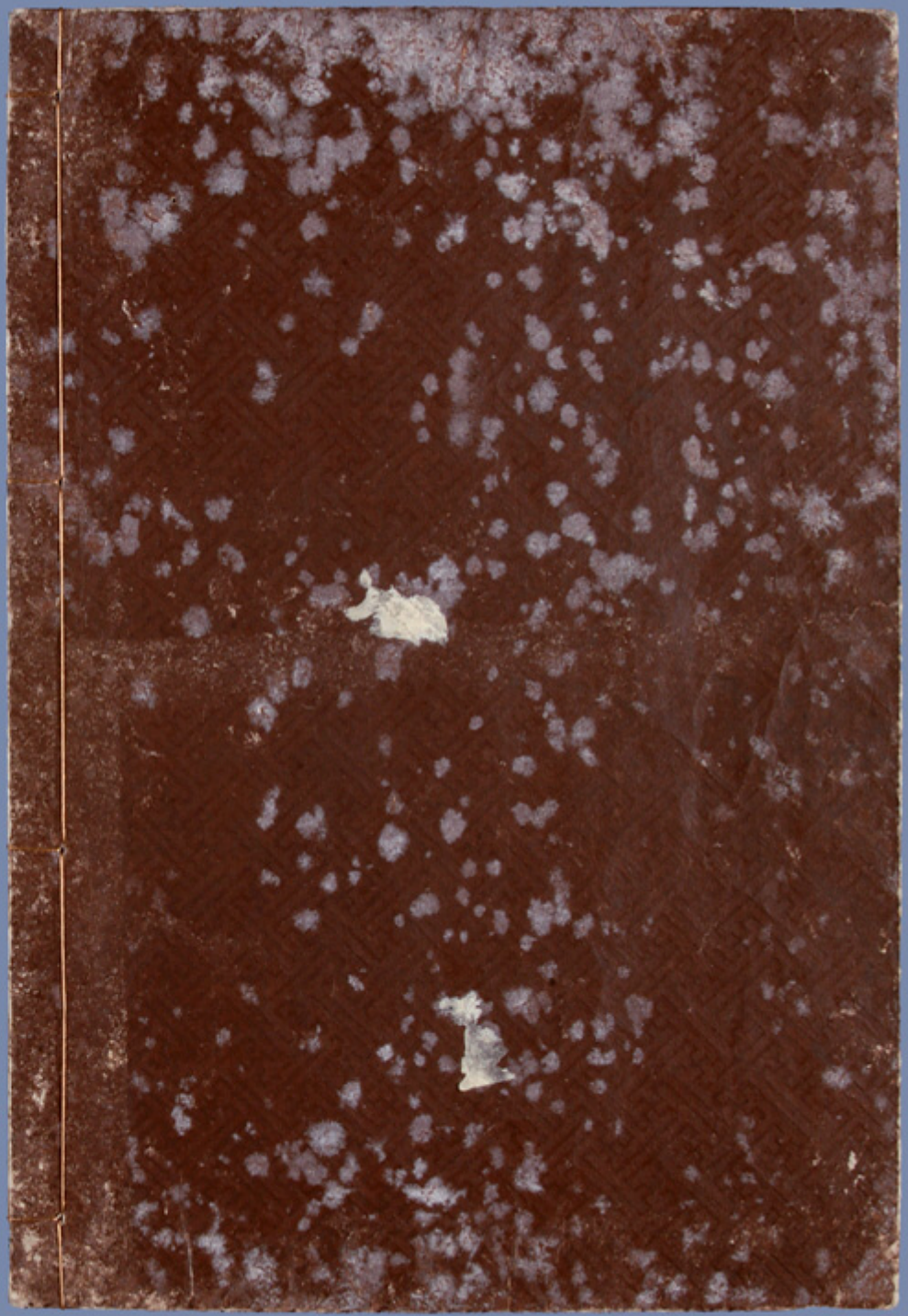
ゝ来ゝ服ゝ山ゝ水ゝヲホウゝゝゝ出ゝ出ゝ〜〜此ゝ二ゝ来の松ゝゝ人ゝ出ゝ来ゝ松の

あゝゝ来ゝのゝ〜〜想ゝ出ゝ〜〜焦ゝ〜〜マコマイトコ川出ゝ焼ゝ石楠花ゝ来ゝ樹ゝ〜〜ゝ

ゝ来ゝ樹ゝゝの異ゝ来ゝゝゝゝ

夕張日誌跋



遠江国佐村

松井西楚画